

によぜがもん掲載記事「おおらかさとは」で市長が話された土壁塗りについて、参加した政策秘書課職員と話をした内容です。

土壁塗り

以前によぜがもんでお話しした、土壁塗りのイベントを職員に紹介したところ、家族で参加してきたとのことでした。とても良い体験になったとのこと、興味深い事をいろいろと話してくれました。

土壁作りは、まず壁の基礎として、細く割った竹を数センチ間隔で十字に組んでいって、藁（わら）を編んだ縄で結び、竹小舞（たけこまい）を作ります。その上に土を塗っていくのですが、単なる土ではありません。粘土質の土と稲藁（いねわら）に水を入れてよく混ぜ、1か月ほど寝かせます。すると、稲藁についた菌によって発酵が起こり、粘りが出ます。ゆでた大豆を藁で包むと、発酵して納豆を作ってくれる納豆菌も藁の中にいます。これらの菌が発酵し、菌糸によって粒子同士が結びついた泥は、多少の雨風を受けても崩れない、粘り強い壁になります。最後に表面をなめらかに仕上げるのは、多少のコツがいりますが、竹小舞に土を乗せていく作業は簡単なので、小学生の子どもでも楽しくできたとのことでした。



こうして作る土壁は、一見古くさいものですが、実は先人たちが築き上げてきた、日本の技術の結晶です。最近の家は石こうボードやコンパネで壁を作り、壁紙や接着剤には化学物質が入っています。これらの壁は、中が空洞になっており、エアコンをつけると家の内外に気温差が出て、壁の内側で結露が起こります。これが建物全体の寿命を縮めますが、土壁は空洞がないため結露しません。自然の素材で作られているので、化学物質によるシックハウス症候群とも無縁です。厚い土により高い断熱性があり、呼吸をするように湿気

を吸ったり吐いたりするので、夏は涼しく冬は暖かいのです。また、日本は地震大国でもあります。十字に組んだ竹小舞と、粘り強い土でできた土壁は、地震を受けると壊れることによって揺れのエネルギーを吸収し、高い免震性も発揮します。崩れ落ちた土は練り直し、折れた柱は取り替えて、家はよみがえります。その上、土は燃えないので防火性もあります。日本には四季がありますが、夏は高温多湿でジメジメして、冬は低温乾燥で空気がカラカラになります。こうした美しくも厳しい日本の風土に、土壁の家は最も適しているのです。

土壁塗りが教えてくれるおおらかさは、良くない意味での「適当」や「いい加減」なものではなく、本質的には、多様性を認めて受け入れることだと思います。これからの時代のルールやサービスにはおおらかさが必要だとお話ししましたが、適当なルールや、いい加減なサービスを薦めているわけではありません。竹小舞も土壁も適当なものではなく、技術の結晶です。協力して作業を行う人々もいい加減で人に頼り切るのではなく、人を思いやる気持ちや、自立した人間としての総合的な力、人間力が必要です。ルールやサービス、それを使う人間も含めて、様々な性格の人々や、自然素材や生き物、不規則・イレギュラーといった、様々なものに対応できる力を持ち、受け入れて楽しめるおおらかさを身につける必要があるのだと考えています。

～市長の話を聞いて～

土壁塗りイベントに参加した職員です。土壁を実際に塗ってみるまでは、単なる原始的な壁だと思っていましたが、実際の土壁は、日本の気候と材料を研究し尽くし、バイオテクノロジーまで駆使した技術の結晶で、舌を巻きました。材料に竹も使っていますが、そのしなやかさは、自然に逆らわず受け流し共生するような、日本古来の良き文化をイメージさせるものでした。イベントも講師の方も土壁もおおらかで、しなやかでした。